

(事例)フィリピンでの木材追跡システムの構築

- 林野庁は、2016～2019年に、豪州、米国、韓国とともに、ITTOを通じ、フィリピンにおける木材追跡システム構築プロジェクトを支援(拠出額: \$392,930 (総拠出額: \$497,930))。

(趣旨)

- フィリピンでは、これまで、我が国拠出のITTOプロジェクトを通じて、森林行政に関する情報システムを構築。
- 他方、立木から製材までの流通経路を追跡する「森林資源モニタリングシステム(Forest Stock Monitoring System: FSMS)」は、チョーク等の道具に依存するため、信頼性に欠け、地元市場で取り扱われる木材製品には、違法伐採に由来するものも含まれる疑いがあった。
- このため、フィリピン政府は、既存のFSMSをIT技術によるシステムへ発展させ、試験的に運用するプロジェクトを実施。

(成果)

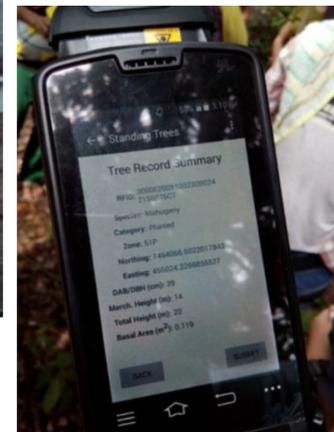
- 同プロジェクトでは、電子タグとQRコードを使用するシステムを採用。伐採前の立木に電子タグを取り付け、ハンディ機器に直径や樹高等の情報を入力。入力されたデータは、ホストサーバーで管理。製品への加工後は、スマートフォンで読み取れるQRコードを取り付け。電子タグ又はQRコードにより、伐採箇所を確認することが可能。
- 本システムは、インターネット環境が不十分な屋外での作業を考慮した設計となっており、オフライン状態で入力したデータを事後的にホストサーバーに送信することが可能。
- 国内3か所で試験的な運用を実施、操作性や有効性を確認。
- 今後は、対象製品の合板、単板等への拡張やIT技術の進歩に即したシステムの改修を予定。



電子タグ



電子タグを立木に取り付け



情報入力用ハンディ機器
(写真: ITTO)